

---

IL

月山 耀真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I

### 【NZコード】

N5345V

### 【作者名】

月山 耀真

### 【あらすじ】

壁の中に閉じこもった人間「人類」、壁の外に追い出され超能力を得た人間「イル」

人類が「領地奪還」を名目にイル撲滅計画を実行する。

主人公ヨーヨー、その仲間がこの世界で生き抜く物語。

## prelude1・1（前書き）

はじめまして。私、月山 耀真です。

この度、この「小説家になる」、「という素晴らしい投稿サイトを見つけまして、愚作ながら投稿させていただきました。

この作品は、私の趣味の一環として作成したものです。多くの読者様に楽しんでいただければ幸いです。

I L

俺が突つ立つてゐる所はもともと大都市が広がっていた。名前は横浜つていうらしい。今は廃れ、ただ瓦礫とゴミ屑が広がるだけの廃墟都市になつてゐる。

俺自身、どうしてこうなつたかは分からぬ。ただ、朝に目覚めたみたいに意識が戻つて、気づいたらこうなつてゐた。

俺は勝手に世の中から隔絶されたつて思つてゐた。でもどうやら違つらしい。此処みたいな所はいっぱいある。

今日も、嫌なほど青空が広がつてゐる。綺麗だ。でも足元や水平線を見るとやっぱり殺風景、ゴミだらけ。

こんな生活を、俺は3ヶ月続けていた。

でも、いきなり奴は現れた。

そいつは元凶？それとも…

あの時の俺には、どっちだか分からなかつた。

いきなり、俺が闇に包まれたのはいつだつたのだろう？

宇宙空間に漂つてゐるような感じで、ただ寒かつた。死んだのかと思った。本当に苦しくつて、淋しくつて。でも涙も出なくて。

ただ、人と話したかつた。誰でも良い。殺人鬼でも誘拐犯でも。本当に長い夢だつた。

そして、気がついて目が覚めたら、いつもと全てが変わつていた。場所、人、時間まで。自分のこと以外何から何まで。もしかしたら好きな人まで。

怖かつた

でもすぐに慣れた。俺は一人で寝床を作つて、一人でメシを探した。もう自分以外は何物でもない。ただの物質だ。

そう思つていたら、案外生活は楽で、氣まで、悪くなかった。

普段どおりに起きる。朝の6時。畳で作ったベッドから起きて、いつもの色あせたジーパンと昨日拾つたワイシャツに着替えた。

「……」

食料置き場の飲み水がまた無くなつてゐる。やられた。今回で三回目だ。仕方が無いこと。いま、誰もが飲み水を探し求めてゐる。こんな状況で犯人が分かる訳も無いので、犯人探しも時間の無駄だ。

バッグを背負つて、階段を降りた。これでもここは三階。

外はまだ暗い。でも仄かに水平線が明るくなつてゐるのは分かる。今日もこの調子だと晴れる。そう感じた。

8時に集会がある。自分コーライチを含めて3人のグループで、一緒に食料を探している。彼らとは数日前に知り合つたが、なかなか面白くつて良いやつらだ。

近くの堀に立て掛けたバイクにまたがつた。免許を持つていないけど、こんな荒れ果てた道だつたら関係ない。俺は自由だ。

ボロボロのバイクを唸らせる。久しぶりにエンジンは快調だ。後ろにバックをロープで括り付けた。

道はやつぱりガタガタ。握るハンドルに振動が伝わる。正面からの風は冷たく、鋭い。

たまに、落ちてゐる瓦礫なんかに躊躇することもある。でも人はたまにしか歩いてないし、事故るとしたら、被害者は自分自身だから気が軽い。

寝床のビルがどんどん遠ざかる。でも多分迷わない。だってあそこは俺の家だ。周りは廃墟で、あのビルも廃墟だつたとしても、あそこだけは特別だ。

右側に川が見える。廃墟とは対照的に日光を浴びてきらきら光っている。汚れた水を汲む人、魚を釣つてゐる人、何人もいた。

太陽が姿を現した。やっぱり青空。

上を見ながら、バイクを走らせる。

ああ、気持ちがいい。

気ままに運転をしながら、時には風景を眺めたりして楽しんだ。  
まだ集合時間まで結構ある。こんな感じで時間を潰すのも悪くない。  
しばらく走っていると、後ろの荷物がずれてきたので、バイクを  
止めた。十字路の真ん中で止まって、スタンドをかける。

ロープが解けている。これがタイヤに巻き込まれると危険だ。今  
度はバッグの形が変わるぐらいきつくなっていた。

手がなんだかダルイ。つま先立ちして体を空に向かって伸ばす。

「くわああ

腹の底から声が出た。

## pr e l u d e 1 - 1 (後書き)

さて、ここまで読んでくださった読者様へ。

どうでしょうか？まだ起伏のない前奏曲のような内容になってしま  
いました。

初めての投稿になりまして、必要のない心配をしております。すぐ  
に慣れれば、と思うばかりです。

プロフィールに記載されていると思いますが、私はまだ学生です。  
定期考査や用事が重なることが多い、連載が途切れることがあるか  
も知れません。ご了承ください。

次回も、自分を含め皆様が楽しめる小説を投稿できれば、と思いま  
す。

月山 耀真

雲ひとつない。

「なあ、にいちゃん・・・。」

伸びている途中に、突然声を掛けられたのでビックリした。振り返つてみるとバイクにまたがった毛むくじらなオッサンが、無表情でこちらを見つめていた。

「はあ、なんでしょう??」

「そいつは、あんたの?」

オッサンは、俺のバイクを指差している。

「たぶん・・・」

「たぶん??」

実は、あのバイクは目が覚めた時に近くにあつただけで、自分のものでは無かつた。

「違います。俺のじやありません。」

「ふうん」

「何か、用ですか?」

「いや、違うよ...。ただ何か誰も元気そうな奴がいねえからよ...。」

「俺が元気そうだつた?」

「そういうこと。いいバイクじやねえか。」

白い歯で、ニヤッと笑うとオッサンはタバコを吸い始めた。俺はどこから来たのか、何しに来たのかを尋ねたが、オッサンは「しらねえ」「わかんねえ」と言つばかり。

「なんで、そんな事聞くんだ?」

オッサンはバイクから降りて、地面に転がっている角材に腰を下ろした。俺もバイクのスタンドをかけて、地べたに座つた。

「何でだろう?俺も自分のことがわかんねえ。突然こんなふうになつて。」

「突然??」

オッサンは初めて表情を変えた。なんだか驚いている様子だ。

「そう、突然…。何もかもが変わってしまった。町もこんな廃墟だらけじゃなかつたのに。」

「……」

「俺らが寝ている間に、何があつたんだか…」

青い空を仰ぎながら、呟いた。考えても無駄なことなのに：

「いつたい何のことだ？」

オッサンが口を開いた。明らかにわざとまでのふざけた感じとは違う。

「？？」「？？

なぜ？この人は知らないんだ？考へにふける。

「どういう事だ！？」

襲い掛かるように聞いてきたので、あせつて答えた。

「何のことだか、こっちが知りたいよ…」

「…」

オッサンは何だか、深く考へ込んでいるようだつた。ずいぶん長く、20分ぐらいしてようやく元に戻つた。

「どうしたの？」

「いやいや、考え方。でももう大丈夫。」

不精髪を搔きながら、作り笑いをうかべる。

「はあ…」

いきなりオッサンは立ち上がりつて、俺を見下げた。顔面は影になつて見えなかつたが、こっちを向いて言つているのは確かだ。

「お前、仲間はいるか？」

タバコを足元に落とし、踏みにじる。タバコの香りが鼻をくすぐつた。

「はい、一名だけですが…」

咽ながら答える。

「よし。そいつらにも会わせる。」

声は相変わらずのふざけ調子だったが、顔が真剣だったので、俺

は断らなかつた。でも理由が気になつた。なぜ？正直、信用できそうにない。

「お前らに伝える」ことがある。「

心で思つていたことの回答をされてしまつたので、焦りを笑いでごまかした。

「でも…」

完全に鎮火したタバコを見つめながら、言つた。

「大丈夫。お前たちに損になるような事はしないさ。」

オッサンはバイクに乗ると、張り切つた声で叫んだ。

「よし、行くぞ～」

「でも、場所知らないでしょ…」

前方で張り切つているオッサンを牽制して、前に出て言つた。

「じゃあ、こっちです。」

エンジンは、一台とも好調だ。唸りを上げて走り出す。

## prelude1・2（後書き）

こんにちは、月山輝真です。

昨日に続きまして、最新作を投稿いたします。

まだまだ話は序盤です。仲間である人々と会っていなければ、このオッサンの名前も未発表です。

まだまだ盛り上がりには欠けますが、徐々にテンションを上げていきたいな、と思っています。

いつも集まっている場所は、そんなに遠くない所にあるトンネル。オッサンを連れて、やつと着いた。集合時間、ギリギリ。

「あんたが、あんな所で一服するからこんなに時間が掛かったんだから！」

「仕方ないだろ。俺は禁断症状になるとヤバイの。」

「じゃあ、タバコなんてやめろよ！」

「いや、無理無理・・・。」

トンネルの入り口にバイクを立てかけながら、口げんかしていた。なんだか楽しかったような気がする。

トンネルの中は涼しい。隣にいるオッサンは嬉しそうに前を歩いていた。俺は何度か来た場所なので、緊張もしなかった。

奥のほうで、明かりが見える。あれだ。

人が向かってくるのも見える。メンバーの中の誰かなんだろうけれど。どうも見たことがないような感じがする。

「あの～・・・」

影が喋りだした。こんな声は聞いたことがない。俺は足を止めて。オッサンにも合図を送った。オッサンは気がついたらしく、じっとしている。

「何？」

「あなたユーチューバーさんですよね？？」

なんで、俺の名前を…言葉にはならなかつた。

「だから、なに？」

「奥あと二人が待っています。ついてきてください。」

オッサンのほうを見ると、「大丈夫」のサインを出している。俺は影について行つた。

明かりが点いている所には、小さな小屋が作られていた。こんな物は前に来たときには無かつた。

錆だらけのドアを開けると、見慣れた仲間たちがそこにいた。

「あーっ！－！ユ－イチだ。」

最初に叫んだのは、廃墟の中で知り合ったメグミ。

「やあ、おそかつたね・・・。」

これは、このトンネルの中で出会ったシュンヤ

「道が混んでて・・・。」

挨拶代わりに軽い冗談を言つた。シュンヤは敏感に反応して突っ込みを入れてくれた。

「バカ！あんな道が混んでる訳無いだろ。」

「でした。」

奥で、誰かこじんまりとしている女子がいる。多分さつき驚かせてくれた奴。俺のほうから声をかけた。

「あんた、名前は？」

女子は小さい顔をこっちに向けて、ハキハキとした声で話した。

「レイと言います。さつきはビックリさせてしまません。」

「いや、いいよ。大丈夫。ユ－イチです。よろしく。」

後ろで足を組んでオッサンが居眠りをし始めた。自己紹介もしないで寝るな！肘で突いて起こした。

「おい、オッサン、自己紹介しろ！」

「へえ、なんでえ？」

「当たり前だろ、常識として…」

「わかつたよお」

全員が、注目した。オッサンはフラフラッと立ち上がり大欠伸。そして腰に手を当てて喋つた。

「え～っと、オジサンです。」

「……」

「あ～っと、バイク持つてます。」

「……」

「悪い人ではありません。多分良い人です。タバコ吸います。自

「…」

見かねて耳元でアドバイスをした。

「おい、オッサン。名前とか、どこから来たか言わないと。」

「なるほどな。」

「頼むぜ、オッサン」

ゆっくりと座つて、耳を澄ます。

「え～っと俺の名前はつと。たしか『ローロー』です。出身地はビリジニア州です。」

「でも言えません。」

なぜだか分からぬけど、拍手が起こつた。俺も合わせて手を叩く。オッサンはなんだか嬉しそうにしていた。照れて、顔が赤くなつていて。この人にもいろいろな表情があるんだなつて、当たり前なことを再認識した。

ショーンヤが大きなノートを広げて、机の上においた。そこには今まで行つたことのある場所のデータが詳しく記されていた。

「うん？？」

オッサンがノートを見ながら首を傾げている。

「どうかしましたか？」

レイはオッサンの異変に気がついたようだ。優しい声で、オッサンに訊いた。

オッサンは肘をついて、口を曲げている。

いやあ、お前らつてこの辺の住民なんだる。何でこうやって書かなきやいけねーんだ？

「えつ？どういってのー」と…

今度はメグミ

「だから、いちいち書かなきや覚えられねーの？地元だろ？」

「わかんねーんだよ。俺ら。」これが地元かどうかすら。

オッサンの後ろで、小声で言つた。

「オッサン。覚えてるだろ。俺らはもう思ひ出したくねえ。あの

闇を。」

「闇？」

「そうだよ。あの闇、眠りのせいで何もかも忘れちまつた。時は流れ、自分自身以外の物は全部変わっちゃった。」

「なんの…なんの事だ??さっきからお前…」

部屋の中は一瞬にして、静かになった。もしかして、このオッサンは何も知らないのか？俺含め、ここに皆がそう思つただろう。シヨンヤがペンを離さずに訊いた。

「あなたは、なにも知らないのですか？」

「ああ、知らん。」

「なぜ？」

「わかんねえよ。」

「ここ数年、どこにいましたか？」

「…言えねえって言つただろ。」

皆がじつと見つけてるので、このオッサンもシラをきれなかつたのだろう。やつまで黙つていたことを、おとなしく話した。

「と、東京」

「東京！？？」

全員が叫んだ。

東京、俺らの中では唯一、法律が存在し、綺麗に整備された町があるという噂。できる事なら行つてみたい場所もある。

「そう、東京。今は東京国になつてるけど…。」

「じゃあ、東京国の中は、こんな廢墟だらけじゃないの？」

「当たり前だ。高速鉄道がはしり。高層ビルが立ち並ぶ。東京が新文明を独り占めにしているんだろう。」

俺は、ひとつ疑問に思った。なぜ東京にいたオッサンはあの恐ろしい体験をしていないのだろう。それに東京だけが国として自立し、文明や法律を守れているのはなぜなんだろう？

「東京国に住んでいる奴らは、“外の世界”のお前らを「イル」と呼んでる。英語で病氣っていう意味だ。」

オッサンは、悲しそうに話した。

「話したくねえが、いざれ分かるんだ。教えてやるよ。」

机の上にオッサンが腰掛け、世間話をすりよつに遠い田で話した。

「東京や名古屋、大阪、神戸、札幌、仙台、福岡。日本の主要都市は全部そつしている。」これらは小さな国になつて暮らしている。それぞれの町には地下主要道路じやないと決して行き来できない。町の周りには「アパート・ウォール」つて言つでかい壁に包まれているんだ。」

レイが腕に顔を乗せながら訊いた。

「じゃあ、ゴローさんはどうやって出てきたの?」

「頑張つて…出てきた…。」

休ませまいと、メグミが尋ねる。

「なんで? 東京國の中のほうが暮らしやすいでしょう。なんで出てきたの?」

「理由があ…。情けなくつていえねえ…。」

オッサンは低い声で、一人で笑っていた。でも俺には悲しくつて、悔しくて泣いているように見えた。

何も言えなかつた。俺以外の奴らは何かしら人生の目的を持つている。それに比べて俺はただ生きているだけ。

メグミはあんな感じでも、自分の本当の親を探す目的がある。シユンヤはうつすらと覚えている親友との再会が目的だと以前聞いた。

レイは、あいつには何かあるのだろうか? もしかして、俺と同じような今を感じているんじゃないのか?

「まあ、まだ俺らには知つてもどつにもなんねえ。」

シユンヤが話を切り出した。

「まあ、そうかもしけん。」

とオッサン。

「おい、コーラー。お前にここに泊まれ。ずっと。」

シユンヤが思いついたかのよつこ、提案してきた。

「えつ? ?」

「えつ? ?」

俺には家がある。別に愛着がある家ではないが……。でもオッサンもいることだし、ここにいる ほうが心強いかも。

「いいの？？」

分かりきつていたけど、嬉しさと、躊躇いから抜け出した勢いで訊いた。

「いいに決まっているじゃん」

メグミが満点の笑顔で、答えた。レイも嬉しそうにメグミの後ろで頷いていた。久しぶりに嬉しかった。いつも一人だった俺に、本当の仲間ができたんだ。

オッサンにもそう言うと、嬉しさのあまりか、小屋から飛び出して道の真ん中で踊り始めた。みんなそれを見てクスクスッと笑っていた。

久しぶりに暖かいひと時だった。

## prelude 1 - 3 (後書き)

仲間がやっと出てきた3話目です。  
同じ日に2回の投稿になりました。  
いかがでしょうか。

「prelude」とは、英語、フランス語で前奏曲を意味します。  
まだ、物語の序盤ということを伝えたかったのです。  
それでは、また。

月山 輝真

俺は荷物を取りに行くため、家としている廃墟に帰るために、バイクにまたがった。トンネルの中では分からなかつたが、もう田は落ちて暗い。でもまだライトを点ける程ではない。

バイクにキーを挿して、エンジンを掛けた。持ってきたバッグは小屋の中に置いてきたので軽快に走れそうだ。

「お~い

オッサンの声だ。

「なに?」

走つてきたので、オッサンは苦しそうに肩で息をしていた。右手には、バイクのキー。ついでくるつもりだとすぐに分かつた。

「おれも行く。」

「そう言つと思つたよ……」

いそいそとバイクにまたがつて、俺を見守りながら、俺はエンジンを鳴らさせた。早くこよ、の合図。

「せかすなよ~」

後ろから、ゆづくりとオッサンはやつてきた。

「じゃ、行くよ。」

「せつかちは、もてねえぞ!」

「余計なお世話だ。」

ハンドルを思つくり捻つた。夜のドライブは人生で初めてだ。

ヘルメットをかぶつてないので、風がもろに顔に当たる。涼しくて気持ちいいけど、たまに虫なんかが当たつて痛い。

すぐに回りは暗くなつた。ライトを点ける。

夜は道がよく見えないから、耳聞ほどは飛ばせない。20キロぐらいでゆっくり走つた。

オッサンのバイクが並行してきた。

「夜は余計なこと考えないで走れるからいいな…」

真つ直ぐ前を見ていたので、オッサンの表情は分からなかつたけど、多分、いつも通りにニヤニヤしているんだろう。

嫌になるほど日光を発していた太陽は、いつの間にか水平線に沈みこみ、変わりに冷め切つた表情の三田川が空を支配していた。

「さつきの話だが…」

オッサンが珍しく、真つ直ぐを見つめながら運転している。でも今

の声は間違いなくオッサンだ。

「何?」

「やつぱり、お前だけに言つておくわ。」

川を沿うように、2台のバイクは走つてゐる。その他、地上に光るものはない。俺は、ただハンドルから伝わる振動、風を感じながら、耳を澄ました。

「何のことについて?」

「ちよつと、機密事項。」

「ふーん…。」

「お前んちで話そづ。」

トンネルから出発して、けつこうかかつた。俺の家は、引越しとなると暗い表情で俺たちを迎えた。バイクを止め、階段を上る。

「こっち、ここの3階。」

ペンライトでかざして、オッサンを案内する。オッサンは物珍しそうに、キヨロキヨロ辺りを見回りながらついてきた。

「お前、3階に住んでんのか?金持ち思想だな〜。」

「うるさい、うるさい。俺は高いところが好きなの。」

ドアを開けて、オッサンを部屋に入れた。あとから入つて、南京錠を閉めた。こいらへんには、水泥棒や食料泥棒がけつこうじるから用心が必要だ。

「結構、神経質?」

ベッドでくつろぎながら、オッサンが聞いてきた。俺はお気に入りの上着を着ながら応えた。

「いや、たいして。」

大きいバッグの中に、自分の必要なものをつめている途中、オッサンが喋りだした。俺は聞きながら、作業を進めた。

「さつき、話すつて言つたことだけど…」

「なに？」

「真面目なはなし、これが一番お前たちに伝えたいこと。」

「話してみてよ。」

「イルは、人類ではない。」

瞬間に自分の手が、石になつたみたいに止まつた。自分の神経が全部麻痺して、体が動かなかつた。

信じられない。

何言つてんだ、オッサン。

嘘だろ。

でも、そつかも。  
あの闇のせいか？

嘘だ。

違う

認める！

「おい！！ユーリチ、大丈夫か？」

オッサンの顔がいつの間にか目の前に来ていた。驚いて、叫んでしまつた。

「おちつけ、ユーリチ。」

手の震えが治まらなかつた。

「オッサン…」

「なんだ？」

こんな心配そうなオッサンの顔は始めて見た。でも、俺は言いたいことは、しつかりと言う主義だ。

「いういう事は、突然言わないでくれ…」

「そうだったな。『ごめん』

笑いがこみ上げてきた。命一杯笑つた。夜のあの水平線まで届くぐら  
い大声で。オッサンも笑つてゐる。

面白いよ。

本当に面白い。

「あんたが、本氣で言つてんだから、これは本当だな。」

「そうだつて言つてんだろ。」

二人とも笑いながら、話した。

「は〜〜。笑い疲れた。落ち着いた??」

「おかげさまで…」

オッサンは安心したのか頷いて、またベッドに寝転がつた。俺は手  
を止めて落ち着いて話を聞いた。手を差し出して、「続きをお願  
いします」の意志表示をした。

「じゃあ、続きを。イルは人間じやないんだ。」

「人間じや、無い?」

「そうだ。もう人類ではない。手遅れだ。」

「手遅れ?じゃあ、もともとは人類だつた?」

「そう、俺の予想では89年前までは…。多分、君たちイルは、つ  
まりアパルト・ウォールの外側にいた人類はみんな同じだ。」

俺は、大きいバッグを枕代わりにして寝転びながら黙つて聞いた。

「イルとは、言い方をええれば、DNA螺旋のうち12本すべてが  
機能している者を指すのだ。人類は12本のうち2本しか機能して  
いない。180年前にフォトン・ウェイブと呼ばれる宇宙線が地球  
に降り注いだらしい。その当時、フォトン・ウェイブを浴びた者は  
絶命すると言わっていたそうだ。だから政府は急ピッチで主要都市  
だけ救う「ラプチャーシティ計画を打ち出した。」

天井に移る影が、だんだん変形していく。俺はそんなことにすら気  
が付かないほど集中して話を聞いた。

オッサンも時々姿勢を変えたりしながら、結構リラックスしている。

「つまり、フォトン・ウェイブでイルが誕生し、主要都市だけが影

響をうけずに人類から変化しなかつた。だとしたらアパルト・ウォールの外は、政府に見捨てられた……？

「オッサンは残念そうに、静かに頷いた。

「おそらく。」

「オッサンは、人類？ イル？」

「俺は、東京にいた訳だから人類だ。だから、多分お前たちのほうが年上つて事になるな。」

「俺らは、200年近く生きているの？」

「多分な。理屈ではそうなる。」

「ふうん」

「さて、問題点を話そう……。」

オッサンが起き上がった。さつきの語調と少し違つて、なんだか雰囲気も違う。俺も起き上がった。

「单刀直入に言うと、人類はイルを有害生物と考えている。」

「なつ、なんで！？？」

「分からん。俺ら人類は、壁の外は地獄だつて教わってきたからな。イルが目覚めたのが最近、大体1年たつぐらいだ。そろそろ人類が壁を越えて、領土奪回をスローガンに攻めて来るつてことだ。」

「な、なんで。俺らも元は人類なのに……。」

「大体、現生人類は運命から目を背けた臆病者集団だ。自分たち以外、何も認めない。すべて有害とみなしてしまつんだ。だから、壁の外を自分たちから隔絶した。」

「でも、戦つたとしても、人類は勝てないんじゃない。小さな国ひとつが敵なら。」

「いや、すでに地下にトンネルが開通し、地下都市も出来ていれば、そこから海、空、宇宙どこにでも行ける地下港まである。それぞれ、すべての世界中の都市が繋がつたのが10年前。彼らはいつでも攻める気まんまんだろう。」

風が干切れたカーテンを揺らした。

「オッサンは人類でしょ。どうやつてここまで。」

「俺は地下鉄道の廃トンネルを使ってここまで来た。旧文明、つまりフォトン・ウェイブが襲来する前の時代には、ここも結構発展した町だったそうだ。おかげでたくさん地下道があつたから、行き來自由つて訳。この辺は横浜って呼ばれていて日本国が始めて本格的に外交した町だったそうだ。地下に残っている旧文明の資料にそう書いてあつた。」

オッサンはバッグから埃まみれの本を取り出して、こつちに投げた。本には「横浜開港170週記念」と書いてある。当時の町並みは、高層ビルが並び、競技場、人工島、無駄に長い釣り橋が写真で載っている。どれもこれも、新鮮で輝かしい。

オッサンに本を投げ返して、今度はこつちが聞きたいことを尋ねた。

「壁から出た理由は？」

「さつき恥ずかしくつて言えねえつて言つただろ。」

「ここまできたら言えよ。」

「…俺が外の世界に興味を持ったのは、小さいころからだつた。学校では外の世界は危険だ、つて教えてもらつていても、俺はこんな狭い閉ざされた世界から出たかったんだなあ。どんなに残酷であつてもいい、どんなに寂しくつてもいい。そう思つていた。

で、恥ずかしい事だが、ついこの間、仕事クビになつて出てきたつて訳。」

「へ～。やつぱり適当な理由だ。」

「笑えよ…」

「なんの仕事だつた？」「

「警察」

「へえ、あんたが警察かあ…」

「特殊部隊だつた。生物災害緊急派遣部隊、通称BHDMの一員」

「何の仕事だつたの？」

「生物災害を抑えるための部隊。生物災害といえば対象は主にイルになつてゐる。」

「えつ！？」

「BHDのミッションはイルを撲滅すること。領土を広げるために壁の外に出られるつて理由だけで、俺は志願した。」「じゃあ、あんたは……」

「いや、俺がBHDにいた頃には、イルが少數しか目覚めていなかつたから他のミッションがあつた。最近になつてイル撲滅部隊が編成されたつて話だ。」

「そうか、良かつた。」

「でも、人類は絶対に侵入していくぞ。」

「うん、わかつていい。いつかはね……。」

俺は立ち上がって、中止していた引越し準備を再開した。思つていたほど荷物は多くなく、大きなバッグはまだブカブカだ。  
ほとんどが、衣食品、思い出の品などサングラスとジャケットの他に無い。

ひびの入つた鏡の前で、身なりを整え最後に、拾つたサングラスを頭に挿した。

「どう??」

オッサンは拍手をして喜んだ。

「ハハハ、映画の主人公みたいだ。アクション映画の。」

「じゃあ、そろそろ行こう。」

重たくなつたバッグを背負つて、ドアを思いつきり蹴り開けた。  
蝶番は吹つ飛び、ドアは外れ、階段を転げ落ちた。

「おー、かつこい~」

オッサンが目を点にしながら、妙なお世辞を言い始めた。うれしかつたので素直に受け止めた。

バイクにまたがつて、叫んだ。

「さあ、出発だ!!~」

俺たちは夜風の「ごとく、闇夜をバイクで疾走した。

## confession -1（後書き）

改行などが、最近いいかげんになつてきました。

オッサンの告白によつて、イル発生の原因が見えてきました。そして自分でも驚いているのがコーラーとオッサンの会話が、上下関係が消えた感じになつてきたことです。

こんな感じで、自然に文体が変わつていいくのが、楽しみでもあり恐ろしくも感じています。

月山 耀真

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5345v/>

---

IL

2011年10月9日13時01分発行